

さくらそう通信

戸田のサクラソウについて

戸田市の荒川左岸旧堤外地のポートコースあたりは、かつて戸田ヶ原と呼ばれサクラソウの自生地として、田島ヶ原や浮岡ヶ原などと共に名所の1つでした。

しかし、幻のオリンピックと言われた昭和15年に開催が予定されていた第12回オリンピック東京大会の漕艇場として、昭和12年に戸田ポートコースの工事が始まったことや、その後の第二次世界大戦中の食糧増産のための開墾により田畑にされてしまったため、自生地はなくなってしまいました。

戸田市さくら草保存会(後述)の会員によると、小学校の春の遠足で旧堤外地へ出掛けると、縞もうせんを敷きつめたように群生していたそうです。

このように、可憐な花を咲かせ、戸田っ子の目を楽しませてくれたサクラソウは、戸田市立戸田第一小学校(明治10年開校)の校歌(大正6年制定)の1番に「紫かすみ桜草 名にこそかおれ戸田の里 朝な夕なの つちかいに 学びの園の 匂わしや」と歌われており、校章にも使われております。



イナムラド



羽黒



野の草としてのサクラソウは影をひそめて久しいのですが、幸いなことに市内有志が戸田ヶ原からサクラソウを家に持ち帰り庭先に植えて育てていました。

そこで、これら有志が戸田ヶ原のサクラソウの復元とその保護対策も図ろうと発起人となり、昭和49年1月12日に「戸田市さくら草保存会」を発足いたしました。

事業として、市役所及び文化会館ロビーでの展示会の開催、市役所敷地内にあるさくら草花壇への苗植え、サクラソウ苗の頒布、近隣のさくら草保存会の視察等を毎年実施し、広く市民への理解を図ってきました。

また、持ち帰ったサクラソウが採ってきた場所により、花卉の色や花の目の形に違いがあることから、その自生地付近のかつての地名や建物等の名前をとり愛称を付け、後々までそのルーツが分かるようにして保存することにしました。戸田橋より下流に自生していた花卉が薄いピンク色のものを「イナムラド」(下肥をあげる河岸名)、ポートコース付近に自生していた花卉が濃い紅色で花の目の黒い部分の外側に白い輪があるものを「羽黒」(明治40年に上戸田氷川神社に合祀した羽黒権現社からとる)、笹目橋付近に自生していた花卉が「イナムラド」よりやや濃いピンク色のものを「辺島」(地名)、そして、花卉が濃い紅色で花の目の黒い外側に白い輪の無いものを「辺島紅」と名付けました。

戸田在来種の保存策として、荒川左岸堤外にある彩湖道満グリーンパーク内の花壇に苗を植え、毎年手入れをしながら増やす努力をしてきました。

他に、市内の小、中、高校より依頼があれば各学校の花壇に苗を植え、手入れの方法など指導をしてきましたが、熱心な先生がいる間は花が咲いていますが、異動等でいなくなると消滅してしまい、今はまったく残っておりません。

その間、昭和51年3月12日に戸田にゆかりの深いサクラソウを再びよみがえらせ長く継承したいとして、市の花に制定されました。

また、昭和56年7月に市歌が制定されその歌詞中でも

桜草が詠われており、戸田市にとって縁の深い草花です。

このようにして保存会は活動を続けてきましたが、会員の高齢化が進み会員数が減少したため、平成12年6月24日に解散いたしました。

各会員の家庭で育てられていたサクラソウは、育てていた人が亡くなると、その後育てる人がいなく大半が消滅してしまっており、現在各家庭での在来種の生育状況は把握されておりません。

また、彩湖道満グリーンパーク内の花壇も手入れをする人もなく、ほとんど消滅してしまいました。そこで、このままでは、戸田の在来種がわからなくなったり、絶滅してしまいますので、荒川左岸堤外地に旧建設省が建設し、戸田市が管理運営を行っている彩湖自然学習センターの脇に、センターが作ったミニ彩湖がありますが、その回りの花壇に、戸田ゆかりのトダスゲ、トダシバ(どちらも彩湖道満グリーンパーク内では自生が確認できない)と共に植え、管理をセンターにお願いして保存を図っています。現在、イナムラドと辺島紅が植えてありますが、辺島と羽黒を探して来春にも植えたいと考えております。

愛称を付けた4種類の戸田在来のサクラソウが、戸田の市花として後世まで残るようにして行きたいと考えています。

元戸田市さくら草保存会事務局 稲垣賢一



ミニ彩湖から彩湖自然学習センターを望む

いま、田島ヶ原が危ない—このままでは田島ヶ原が田島ノ森になってしまう—

ご存知のとおり田島ヶ原は名の知れたサクラソウの自生地です。その田島ヶ原は以前は少し湿った草原だったので、そのような草原を好むサクラソウにとっては住み良い場所でした。ところが、現在の田島ヶ原は以前と比べてかなり乾いた草原に変わってしまい、サクラソウにとっては住みにくい場所となっています。その住みにくくなった場所でサクラソウは今も頑張っているのですが、さらにサクラソウの息の根を止めるような厳しい変化が、現在の田島ヶ原で起きているのです。それは、

田島ヶ原の森林化という現象なのです。

今から85年前の大正9年に田島ヶ原のサクラソウ自生地は国の天然記念物に指定されました。その当時に撮影された写真を見ると、田島ヶ原は見渡す限り続く広々とした草原で、樹木は点々と生えているだけでした。

(写真①)

現在の田島ヶ原はサクラソウ自生地を含めた一帯がさいたま市の『さくら草公園』として整備され、以前の草原とは様相が一変しています。特に公園として整備した時



写真① 天然記念物指定時のサクラソウ自生地（1920頃）



写真③ 境界に咲き誇るソメイヨシノ（2004.4.6）



写真② サクラソウ自生地と公園の境界（2004.5.24）



写真④ 影を落とす境界の植え込み（2004.2.28）

に桜のソメイヨシノをはじめ、マルバシャリンバイ・トウネズミモチ・キョウチクトウ・トベラなどの樹木を多数植えたので、これらの樹木の茂みに視界がさえぎられて広々とした草原の姿が失われてしまったのです。

（写真②・③）

ところが、樹木を植え込んだために失ったのは、見渡す限り続く広々とした草原の景観だけではなかったのです。公園として整備した時に多くの樹木をサクラソウ自生地の境界に植えたのですが、その当時は丈の低かった樹木も、今では6mから10m以上の立派な大木に成長して枝を四方に広げています。そのため、サクラソウ自生地にはこれらの樹木の大きな影ができたり、また、雨が降ると枝葉から大きな水滴が落ちて地面をたたくので、このような場所ではサクラソウをはじめ多くの植物が育たなくなったのです。こうして、サクラソウ自生地の境界に植えた樹木が困り事を引き起こしたのですが、実は、さらに困ったことを起こしているのです。（写真④）

サクラソウ自生地の境界に植えられ成長した樹木は、今では四方に広げた枝に毎年花を咲かせ実をつけています。特にシャリンバイ・トウネズミモチ・トベラなどは枝先に沢山の実をつけ、熟した実は野鳥が食べたり自然に落ちたりしています。ところが数年前からサクラソウ自生地の中で、これらの樹木の芽生えや若木を多数見掛けるようになったのです。（写真⑤）

また、四方に広げた枝は野鳥の格好の休憩所になっていて、いろいろな野鳥が訪れてきます。これらの野鳥が

落とす糞の中にはいろいろな樹木の種子が入っていて、それが芽生えて育つのです。四方に広がった枝の下には、それまでサクラソウ自生地の中にはなかった樹木の芽生えや若木が多数見つかるようになりました。（写真⑥・⑦）

そこで、サクラソウ自生地の中にどんな樹木が種子で繁殖しているのかを調べてみました。平成13年から平成15年までの3年間に、サクラソウ自生地の中で見つかった種子から芽生えた樹木は表1のようでした。

見つかったのは全部で30種ですが、約半数の16種は種子を落とす親木がサクラソウ自生地の中や境界付近にあるので、この親木から落ちたり鳥に運ばれたりした種子からふえたのでしょう。残る14種はサクラソウ自生地の中にも境界付近にも親木が見当たらないので、鳥などによってどこか別の場所から種子が運ばれてきてふえたと思われます。

樹木の芽生えや若木はサクラソウ自生地の中の広い範囲で見つかりましたが、特に第二次指定地では境界に植えられた桜（ソメイヨシノ）



写真⑤ 実をつけたトウネズミモチ（2004.11.10）